

さけます情報

さけます人工孵化放流に関する古文書の紹介(3)

択捉島ウルモベツ紅鱒孵化場

の が わ ひ で き
野川 秀樹 (北海道区水産研究所)

はじめに

今回は、古文書の紹介という表題とは内容が一致しないかも知れませんが、大正時代の復命書などとともに、択捉島のウルモベツ紅鱒孵化場の貴重な写真を紹介します。

択捉島漁業誌(択捉島水産会 1937)によれば、択捉島におけるさけます人工孵化放流の始まりは、明治 22 年に千歳鮭鱒人工孵化場に研修生を派遣し、1 年後に帰島した研修生を技術者として薬取郡宇トロに孵化場を建設したのが、その始まりとされています。明治 23 年にサケ親魚から 53 万粒の採卵を行っています。

ベニザケ(当時は「紅鱒(ベニマス)」と呼ばれていました。本文では引用文に出てくる「紅鱒」及び孵化場の名称としての「紅鱒孵化場」の他は、現在の標準和名である「ベニザケ」を用いることとします。)の人工孵化放流ですが、択捉島の河川に遡上するベニザケは、大正 4 年に択捉島のさけます人工孵化放流の状況を調査した復命書(半田 1915)及び捕獲統計資料(北海道さけ・ますふ化場 1956)によれば、ウルモベツ川が最も多く、次いで年萌川、薬取川、トーロ川となっています。ベニザケの人工孵化放流もこれらの河川を中心に行われており、いずれの河川にも流域に湖沼が見られます(図 1)。

ウルモベツ湖について、択捉島漁業誌には「明治 17 年頃になって始めて紅鱒の群集地であることが知られ、山間の 1 湖、周囲 1 里余にしてウルモベツ川の源である。ウルモベツ川は紅鱒のみが遡上する河川で、択捉島ではここだけである。その紅鱒は鱗色鮮美、脂肪濃厚、形は肥大で、他の河川に遡上するものとは別種にして、真に天恵の好繁殖場である。」と書かれています。いかに見事なベニザケが遡上していたか、想像を掻き立てられます。更に、「同所は瘴煙冷霧狐熊の巢窟*1」として、未開の地であったが、明治 24 年に水嶋隣多が初めてここで漁業に着手し 500 石を収穫する。翌年缶詰所を建設し、明治 26 年には私費をもって湖畔に人工孵化場を設けるも、明治 30 年に事故のため放棄する。」とあり、ウルモベツ湖畔に初めて紅鱒孵化場を設置したのは水嶋氏という人物で、明治 27 年から明治 30 年まで 3 年間にわたっ

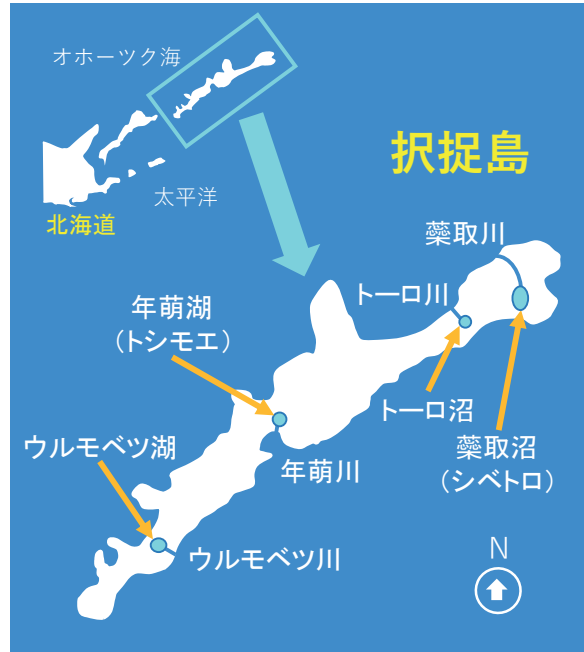


図 1. 択捉島の主なベニザケの遡上河川。

て人工孵化放流が行われたものと思われます。その規模は不明ですが、その内容は甚だ貧弱なものであったようです(半田 1915)。再開されたのはその約 20 年後の大正 4 年のことで、谷茂平氏によってウルモベツ湖畔に紅鱒孵化場が建設されます。

ウルモベツ紅鱒孵化場への道程

この霧深い辺境の湖畔に設置されたウルモベツ紅鱒孵化場へは、果たしてどのようにして行ったのでしょうか。「紅鱒の択捉「紀行」」(渡辺 1966)から紹介します。時は谷氏が紅鱒孵化場を設置した翌年の大正 5 年 5 月のことです。函館から貨客船で出発し、釧路港、根室港を経て、択捉島へは栈橋がないことから、沖に停泊した貨客船から小舟により留別(図 2)に上陸しています。留別からは、1 日目は年萌を経て天寧まで約 30 km、2 日目は天寧から具谷まで 28 km、3 日目は具谷から入里節まで 20 km、4 日目にやっと目的地のウルモベツ(入里節から 20 km)に到着しています。勿論、汽車などの交通手段はないので、全行程草

*1 「冷たい濃い霧に覆われたキツネや熊しか住まないような厳しい辺境の地」ぐらいの意味。

鞋履きで歩いています。4 日目の行程では後半の半分には道路がなく、「エンロク泣セ岩」、「ゴンパ殺磯」と称する難所があり、紀行文には「前者は断崖の下を満潮時には狭い岩を伝って通らねばならない所で、漁場で働いているエンロクという屈強な男がここを通り、途中で足の踏場がなくなり、下には波がゴウゴウと打寄せ、進退きわまって大声で泣いたという所。後者はこれも断崖の下を通るところで、ゴンパという漁夫がここを通りかかった時に、たまたま上から落ちてきた石が、ゴンパに当たってこれを殺した所」と、難所の謂れが書かれており、危険な場所を通過しなければ辿り着けない所であったことが分かります。この難所は地図（北海道総務部領土復帰北方漁業対策本部 1959）にその名前を見ることができます（図 3）。紅鱒孵化場へは、ウルモベツ川に沿って約 4 km でウルモベツ湖畔に至り、湖上を船で対岸の孵化場に渡ったとあります。地図にも「孵化場」の文字が見られ、建物らしき印も見られます（図 4）。また、捕獲したベニザケは綺麗な紅色で、味は非常に良いものであったとも書かれています。

この渡航から 10 年ほど後の昭和 2 年に紅鱒孵化場を訪れた紀行文（木村 1980）にも、やはり上述の難所のことが書かれており、命がけて難所を乗り越えなければ辿り着けない場所であったこと、また、川幅わずか 6~7 m の岩石を積み上げたような河床を、透き通るような赤色を呈しながら折り重なるようにして、ウルモベツ川を遡上するベニザケの壮観な姿に感動したことが書かれています。

ベニザケ発眼卵の支笏湖への移殖

支笏湖におけるヒメマス増殖は、北海道庁技手で千歳鮭鱒人工孵化場の主任（現在の所長職に相当）であった藤村信吉が明治 27 年から明治 29 年にかけて、阿寒湖に生息していた「カバチェッポ（後年ヒメマスと命名）」の卵を移殖したことに始まります（北海道庁水産課 1900）。放流されたヒメマスは順調に回帰し、明治 31 年の回帰状況について、8 月に恵庭山麓に魚群が数十メートルにわたって水面を跳躍する状況が観察され、それが 9 月中旬に支笏湖孵化場地先の沖合に来遊し、10 月に入ると孵化場放流口に無数のヒメマスが群集したとあり、いかに多くのヒメマスが回帰したか、その状況がつぶさに報告されています（北海道庁殖民部 1900）。

このように、移殖されたヒメマスは当初は順調に増加しますが、最高の捕獲数を記録した大正 7 年以降、放流数と回帰数のバランスがくずれ、個体群の崩壊へとつながっていきます（帰山 1991）。この対策の一環として、大正 14 年から昭和 15 年



図 2. 留別からウルモベツまでの行程.

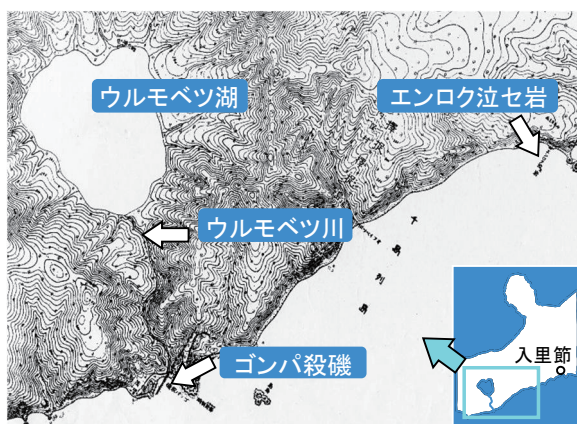


図 3. 地図に描かれている難所の場所。図では小さくて読み取れないですが、矢印の先に図に示した難所の名前が表記されています。

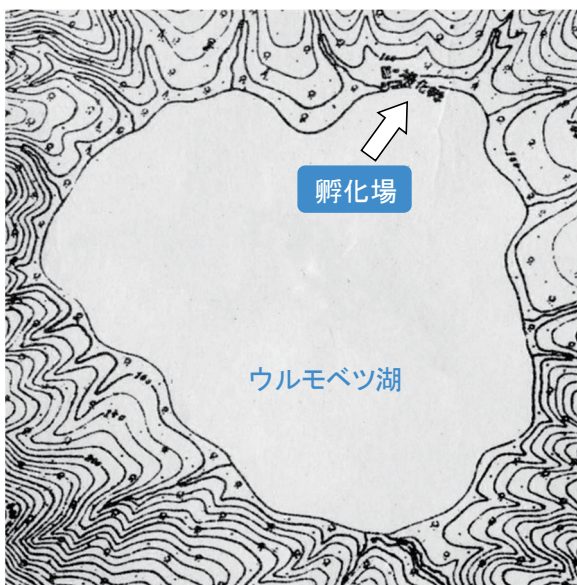


図 4. ウルモベツ紅鱒孵化場の位置.

の間にベニザケ導入による品質改善と資源回復を目指して、約 450 万粒のウルモベツ湖産ベニザケの発眼卵が支笏湖に移殖されることとなります(徳井 1964)。しかしながら、この移殖は、必ずしもヒメマス資源の増加にはつながらなかったようです(帰山ら 2005)。

ところで、発眼卵の移殖は、前述の難所をどのように越えて行われたのでしょうか、興味あるところですが、このことについて書かれた資料を目にすることはできませんでした。後段の写真の孵化室からも、移殖が行われたと思われそうですが、相当の労力と日数を要した過酷な運搬であったと想像されます。

ベニザケのウルモベツ湖への遡上や産卵は、半田(1915)によれば、遡上盛期は7月末から8月にかけてであり、9月末になると背部以下に暗赤色の婚姻色を生じ、湖には産卵に適した河川がないことから、産卵は細礫のある湖岸一帯のいたる所で10月中旬～11月中旬にかけて行われるとあります。そして、人工ふ化放流に必要な親魚の捕獲は、特に産卵が多く行われる孵化場前の湖岸において、曳網によって行われると書かれています。

突然に現れたウルモベツ紅鱒孵化場の写真

ウルモベツ紅鱒孵化場を建設した谷氏は、択捉島で漁業や缶詰工場などの事業を手広く実施するなど、択捉島の水産業の発展に貢献した人物であり(択捉島水産会 1937)、この紅鱒孵化場も谷氏個人によって運営されています。

今回紹介するウルモベツ紅鱒孵化場の写真は、平成8年6月に兵庫県西宮市在住の谷氏の姪に当たる方が、朝日新聞阪神支局へ択捉島の古い写真があると連絡したことが契機となって、我々の目にも入ることになります。連絡を受けた朝日新聞の記者は、何処の孵化場の写真なのかを確認するため、択捉島には官営の孵化場もあったことから、水産庁北海道さけ・ますふ化場(以下「水産庁ふ化場」)や水産庁ふ化場の退職者の親睦会である「さけます友の会」(以下「友の会」)に照会しています。谷氏の姪の方が所持していたことから、ウルモベツ紅鱒孵化場の写真と推察されましたが、水産庁ふ化場の刊行物等に掲載された写真の中に特定につながるものが見当たらなかったことなどから、断定には至りませんでした(坂野 1997)。

筆者は友の会から北水研に寄贈された資料を整理する中で、この写真の存在や由来を知るのとほぼ同時期にウルモベツ紅鱒孵化場の住居を撮影した写真(図5)を発見します。そして、住居を撮影した写真に写っている山の形が、西宮で見つかった写真の孵化場の後背に写っている特徴的な山の形(図6)と同じであること、また、この孵化



図5. 孵化場の住居を撮影した写真。



図6. 孵化場の全景(次頁に記載した全12枚の中の⑤の写真に該当)。後背に特徴的な形をした山が写っている。

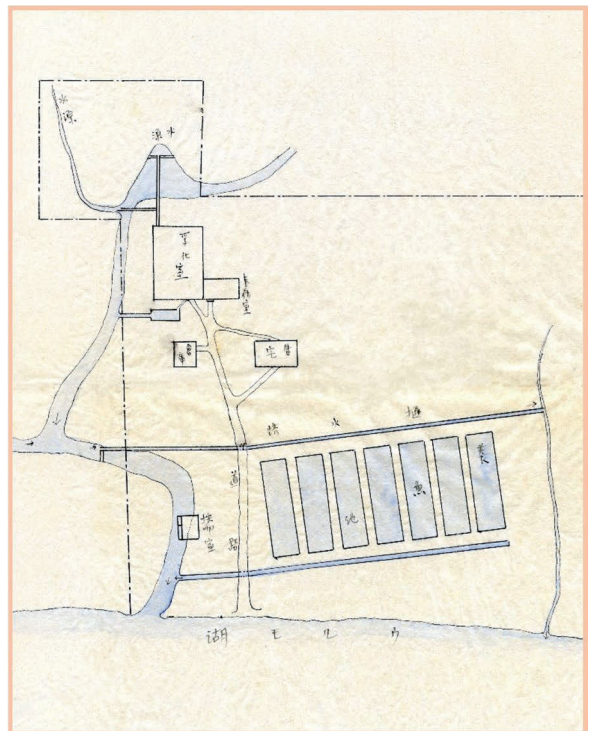


図7. 復命書に添付されていたウルモベツ紅鱒孵化場の配置図。

場が設置された大正4年に択捉島のさけます人工孵化放流の状況等を調査した復命書(半田 1915)にウルモベツ紅鱒孵化場の配置図(図7)が添付されており、この配置図に描かれたウルモベツ湖と孵化場の位置関係や養魚池と採卵室の位置が写真(図8)に写っている配置と酷似していることから、これらの写真はウルモベツ紅鱒孵化場のものと断定して間違いのないと思われます。

撮影された時期ですが、図9に3段の大きな養魚池が写っています。これは図7の配置図には見当たらず、後に拡張されたものですが、この施設の竣工検査時の復命書(田中 1921)が残されており、この復命書から大正10年に整備されたことが分かります。また、昭和4年には孵化室、養魚池等の大幅な拡張工事に係る予算が北海道庁に認められ(北海道鮭鱒孵化事業協会 1929b)、コンクリート造の孵化室等が整備されていることから、大正10年～昭和4年の間に撮影されたものと思われる。

写真は全部で次の①～⑫の12枚で、それぞれの写真の裏に以下のような文言が書かれていました。

① 湖水ノ風景、② 湖中鴨ノ浦ニテ親魚捕獲ノ処、③ 採卵場及孵化場前ニ於ケル引網、④ 親魚捕獲ノ処 孵化室前ニ於テ、⑤ 孵化場全景 右方緑樹間ニ隠見セルハ事務室 事務室ノ左方ハ倉庫 大キナ建物ハ孵化室 左方ニ一部見ユルハ採卵場 前ノ池ハ親魚蓄養池、⑥ 晩秋ノ孵化場、⑦ 孵化室全景、⑧ 孵化室内部(孵化槽配置)、⑨ 孵化室内部、⑩ 仔魚池、⑪ 水源地(其一)六角堂、⑫ 風景(湖中ノ)

紙数の関係もあり、ここでは孵化場の特定等に係る3枚の写真に加えて、孵化室の写真(図10, 11)、曳網による親魚捕獲の写真(図12, 13)を載せました。

なお、これらの写真の一部は、平成8年8月31日に朝日新聞地方版に「幻のベニザケ人工ふ化場(択捉島 大正に開設 旧ソ連占領で閉鎖)、西宮で写真発見」と題した記事とともに紹介されています。写真はその後朝日新聞の記者を通じて、姪の方から友の会へ寄贈され、更に、友の会から北水研に寄贈されています。

おわりに

北海道では昭和9年にさけますの人工孵化放流を実施している民間孵化場の官営化が行われます。これにより択捉島では、官営孵化場として北海道鮭鱒孵化場択捉支場とその管下の8事業場(老門、羅臼、年萌、紗那、有萌、別飛、当路、比良糸)が誕生することになります。ただ、ウルモベツ紅鱒孵化場1カ所だけは民営孵化場として存続しま



図8. 湖岸に立地したウルモベツ紅鱒孵化場(⑥の写真).

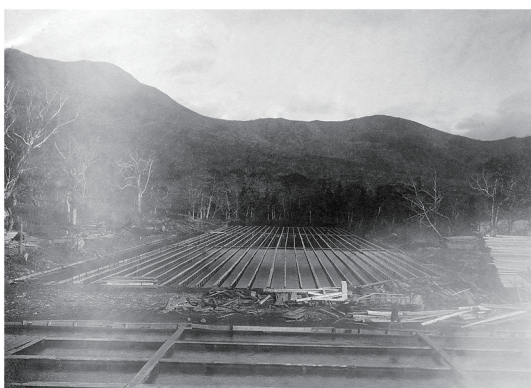


図9. 大正10年に拡張整備された養魚池(⑩の写真).



図10. 孵化室の全景(⑦の写真).
右側に出張った特徴的な屋根の部分が事務室.



図11. 孵化室内に設置された孵化槽(⑨の写真).

す。

官営孵化場の写真は水産庁ふ化場の刊行物等に見ることができますが(北海道鮭鱒孵化事業協会 1929a; 択捉島水産会 1937; 八木澤 1950; 写真集懐かしの千島編集委員会 1981), ウルモベツ紅鱒孵化場のものはコンクリート造に改修された際の孵化室の竣工写真(北海道鮭鱒孵化事業協会 1932)のみでした。このようなことから非常に貴重な写真であり、また、内容的にも施設の配置や親魚捕獲の状況などが的確にとらえており、資料としても素晴らしいものと思われま

す。最後になりますが、貴重な写真の寄贈をいただきました友の会に改めて深謝申し上げます。

引用文献

- 択捉島水産会. 1937. 択捉島漁業誌. 北海水産新聞社, 函館. 269 pp.
- 半田芳男. 1915. 択捉島鮭鱒蕃殖保護事業調査及指導復命書. 北海道庁.
- 北海道鮭鱒孵化事業協会. 1929a. 留別鮭鱒孵化場. 鮭鱒彙報, 1(3): 巻頭写真.
- 北海道鮭鱒孵化事業協会. 1929b. 民営孵化場の拡張. 鮭鱒彙報, 1(4): 11.
- 北海道鮭鱒孵化事業協会. 1932. ウルモベツ紅鱒孵化場(八千万粒). 鮭鱒彙報, 4(2): 巻頭写真.
- 北海道さけ・ますふ化場. 1956. 鮭鱒捕獲採卵数. 北海道さけ・ますふ化場, 札幌. p. 147.
- 北海道庁殖産部. 1900. 北海道庁第十三回拓殖年報. 北海道庁, 札幌. p. 25.
- 北海道庁水産課. 1900. 千歳鮭鱒人工孵化事業報告. 北海道庁, 札幌. pp. 32-41.
- 北海道総務部領土復帰北方漁業対策本部. 1959. 択捉島(六枚の内五). 北海道, 札幌.
- 帰山雅秀. 1991. 支笏湖に生息する湖沼型ベニザケの個体群動態. さけますふ研報, 45: 1-24.
- 帰山雅秀・眞山 紘・加藤禎一・小林哲夫・河村博. 2005. III章 支笏湖の生物とヒメマス. 「湖沼環境の基盤情報整備事業報告書—豊かな自然環境を次世代に引き継ぐために—支笏湖」, 社団法人日本水産資源保護協会, 東京. pp. 31-68.
- 木村鎧朗. 1980. エトロフ懐古録. 魚と卵, 149: 62-67.



図 12. 孵化場前での親魚の捕獲(③の写真).
親魚の捕獲は、湖面に見える船を用いて、産卵のために湖岸に集まってきた親魚を網で囲み、その網を湖岸に引き寄せて行われたと思われます。



図 13. 曳網に使用した船と捕獲された親魚(④の写真).

- 坂野栄市. 1997. ウルモベツ紅ザケふ化場の写真か. さけます友の会ニュース, 130: 9-12.
- 写真集懐かしの千島編集委員会. 1981. 写真集懐かしの千島. 国書刊行会, 東京. 220 pp.
- 田中林蔵. 1921. 大正10年度ウルモ湖紅鱒人工孵化場竣工検査復命書. 北海道庁.
- 徳井利信. 1964. ヒメマスの研究 V. 日本におけるヒメマスの移殖. さけますふ研報, 18: 73-90.
- 八木澤喜家. 1950. 択捉の思い出. 魚と卵, 11: 18-21.
- 渡辺宗重. 1966. 紅鱒の択捉「紀行」. 鮭鱒彙報, 60: 19-22.